

## 中国農村医療事情

高岡市保健センター 熊谷 武夫

富山県農村医学研究会の中国河南省との学術交流の一環として、さる7月に会長の越山先生を団長とする旅行団の視察旅行があったので同行した。

はじめは現地で農業中毒等をテーマとしたシンポジウムの開催が予定されていたが、この方は中国側の都合で中止された。

しかしこれまでは外国人の立ち入りが難しかった農村での調査と視察が許され、短時間ではあったが、中国の農村地帯の医療機関を訪れて、その実情に触れることが出来た。

案内をして下さったのは中華人民共和国鄭州衛生検疫局長の秦先生と職員の方々だった。

まず7月2日には鄭州市の西北約100kmにある武陟県に行った。

8時45分に河南国際飯店を2台の車に分乗して出発した。

越山先生、大浦氏、秦先生、通訳司さんはアウトディ車に乗車。もう一台の三菱パジェロには浅沼氏、安藤先生、熊谷、王永亮医師、河南大学出身の内科医師が乗車した。

まず新郷市へ向かう国道を時速70～80kmで北へ走る。国道の両側には畑が広がり、沿道には規模の小さい餐厅、飯店、汽車修理所(自動車の修理工場)が軒を連ねている。

9時06分、黄河公路大橋(有料)に差ししかかった。黄河公路大橋の延長は11kmで、8年前に建設されたという。

鄭州側に幅約500mの茶色に濁った流れがあ

り、約5分停車して見物した。

今年は渇水で、川幅は通常の5分の1程度であり、河原は見渡す限りの草原と耕地になっていて、驢馬を使って耕作している農夫がいた。

黄河を渡ってしばらくは北へ走り、国道を西に曲がると間もなく、複線の電化された鉄道線路を跨ぐ陸橋にさしかかった。

これは北京と広州を結ぶ京広線で、鄭州駅で連雲港～ウルムチ間の隴海線と交差しているのだが、中国第一の幹線だけあって、線路の規格も信号設備も立派に見えた。

9時45分頃、武陟県に入って間もなく、進行方向の左側に高さ7～8メートルの寺院の山門が現れた。これは後で見物した嘉應観寺院の山門で、ここで左折して狭い並木道をさらに数分走って9時55分に武陟県嘉應観郷衛生院へ到着した。

気温は30度を越えていて、風はなくかんかん照りの暑い日だった。

まず2階会議室に案内されて説明を聞いた。

武陟県の南側には黄河が流れている。面積は832平方km、人口62万人。10郷366郷がある。農業県で米、麦、大豆、家畜飼料など生産高は45万トンである。

農家の収入は一人当たり1,100元。

工業製品としては、紙、皮革、宝石、加工食品等、94年の生産高は45億元。

武陟県衛生局の陳百升局長、同交通局の張

仁清局長（主管医師）によると、保健衛生は向上しつつあり、県内に病院7カ所、15カ所の診療所があり、1,658人の医師が働いており、うち主任医師は12人、専門医師が216人、中医830人であると、また所謂「はだしの医師」は1,400人いるとのことだった。

農薬中毒・農業機械災害についてはいずれも少なく、教育水準の向上で知識が普及して、事故の発生は減っている由だった。

約30分の説明の後に嘉應観郷衛生院の施設を見学した。

これは県内15カ所の診療所（公立病院）の一つらしかったが、道路に面した前庭を持つ二階建ての鉄筋コンクリートの建物の玄関は、日本の鉄道の駅のコンコースのようで両側に中医と洋医の薬局が向かい合わせに作られていた。

屋内には廊下はなく、丁度日本の集合住宅のように、中庭の側に幅が1メートル位のベランダのような廊下があって、そこを歩いて各部屋に行くようになっていた。

説明を受けた会議室の隣には、院長室、検査室、心電図室などがあり、広い花壇がある中庭には日本の公衆便所のようなトイレがあった。

奥の建物は平屋で真ん中が救急外来、左端に手術室があった。

しかしここには病室は無かった。手術室の隣は回復室と聞いたが、大きな手術は住診部（病棟部門）のある病院でしようだった。

救急室の設備はベッドが一つ、酸素ボンベが一本、電動式の吸引器が一組、あとはなんにも見あたらなかった。

日曜日にも関わらず、薬局の前には沢山の人が薬を貰うべく集まっていた。

衛生院の隣の敷地には、公民館のような建物があって「保健站」とあり、暗い室内の戸棚には「健康手帳」のような冊子が並んでいた。

予防接種の個人記録だというのが、日本では

個人に交付しているものを、まとめて保管しているようだった。

11時10分に見学を終えた。

嘉應観寺院の見物を終えて、12時頃に楊府村甲級衛生所に立ち寄った。浅沼氏の温度計は35度を示していたが、村落の木立の中にある診療所の内部は比較的涼しかった。

間口四間、奥行き四間程度の四角い平屋の建物の内部は三室に区切られ、診察室は玄関を入ってすぐのコンクリートの床の部屋で、奥に木製の机と椅子があり、卓上には扇風機が一つおいてあった。

薬局の棚には漢方製剤が沢山並べられていた。

薬局の隣は「注射室」とのことだったが、注射器の容器は瑠璃びきの昔ながらのものであり、ガーゼの消毒容器も極めて古いものだった。

ここでは設備の貧しさが目についた。

「救急站」の表示のある診療所の医師は、交代で泊り込んでいると聞いた。

翌日は温泉の視察だった。

日程の協議が遅れたために、宿舎を午前9時に、今度はアウディ車に秦先生、越山先生、大浦氏、王医師が乗り、パジェロには安藤先生、浅沼氏、司通訳、熊谷が乗車して出発。

黄河公路大橋を渡って温泉への分岐点までは昨日の武陟県への道と同じだった。

10時20分に沁河（黄河の支流）を渡って広々とした畑の中の並木道を疾走する。

11時00分、温泉賓館に到着し、隣の武術館で太極拳の実技を見学してから、12時25分に賓館に入る。

昼食をとりながら、若い馮全義氏（温泉人民政府副県長）の概況説明を聞いた。

温泉の面積は462平方km、人口38万人。13郷、249郷がある。

農業県で麦の生産が多い。農家の年間所得は2,900元である。

紀元265年、司馬炎（武帝）がここで晋を

建国したこと。1372年（明洪武5年）陳家溝で太極拳が発祥したことを聞いた。

14時15分に温県中医院へ行き、住診部の玄関から入る。

住診部とは入院患者を収容する病棟のことを言うらしい。外観は極めて近代的に見えたが、中に入ると戦前の日本の役所の建築のようで、廊下の天井は高いが、照明は薄暗く、冷房はなく、天井の扇風機が廻っていた。

問診部（外来棟）の玄関は住診部のならびにあった。

中庭を通過して製剤部の建物に行く。製剤部の二階は漢方製剤の原料倉庫になっていて、入ると独特の臭いが鼻についた。

鳩麦、どくだみ、大黃など日本でもお馴染みの植物はもとより、ありとあらゆる草根本皮が蓄えられており、生乾きの縞蛇やミミズ、蟬の脱げ殻まで保管されていた。

中医とは漢方医学の医師を意味しているのだが、患者さんとゆっくり対話することによって、その病状を診断しているとのことで、初めから検査、検査と追い立てられる日本の外来とは大分様子が違うようだった。

14時55分、温県中医院を出る。

15時04分、南張羌衛生院へ到着した。ここは煉瓦造りの古めかしい建物だった。

隣に煉瓦塀に囲まれた製紙工場があり、原料の麦藁を搬入するリアカー付きトラクターが道路に十数台駐車して、交通を妨げている。

南張羌衛生院の表札には皮膚病专科医院とあり、煉瓦造りの古い建物で奥には住診部（病棟）があった。

検査室にはやはり顕微鏡と僅かの検査機器があるのみだった。

入院患者の世話は原則として家族が泊り込みで付き添うとのことだった。

15時30分からは南張羌の村落に入り、農家の見学をした。

二軒の農家を見せて貰ったが、いずれも三

世代同居だった。屋内には廊下はなく、居室と寝室は続いているが、台所も便所も棟続きではあっても、一度外へ出ないと行き来出来ず、また老夫婦と若夫婦の部屋も、屋内では行き来は出来ない構造になっていた。

水道の蛇口はあるが、渇水のためか水は出ず、流しの横に大きな水甕がおかれていた。燃料として煉炭が使われていて、煉炭火鉢がおいてあった。

農機具も機械化されたものは、全て共同管理とかで見当たらず、農薬散布の機器も動力式のものはない。

農機具は木や竹で作ったものばかりだった。

最後に村役場（人民委員会）の建物の中にある診療所を見学した。

壁一面に「産児調節」に関わる図譜が掲げられていて、一人っ子政策の徹底のために「避妊教育」が実施されているらしかった。

16時00分 帰途につく。

紙の原料としての麦藁を満載したトラクターに石炭を積んだトラック、さらに鄭州と往来するバスが頻繁に行き交っている道路を、ジープは時速80～90kmで疾走する。目の前で二重に追い越しが行われたり、対向車線を走行したりする度に、思わず下肢に力が入る。

右側通行の道路で左ハンドルの車の運転席の後部に乗車するのは、安全な筈なのに左側通行の運転しかしたことがない私は、何度も肝をつぶしたことだった。

少なくともこの二日間に見せて貰ったものは、外見的には戦前の日本の農村と診療所だった。

最初の打合せの際に秦先生が、中古でもよいから医療機器を提供して欲しいと言われた意味が判ったような気がした。

(1995-08-15記)